

# 『金瓶梅詞話』における明代の文学言語—語法上の問題を中心に

荒木 典子

## 【概要】

『金瓶梅詞話』（以下『金』）は、明代を代表する長編白話小説のひとつとして、高く評価されている。文学研究者は勿論、多くの言語学研究者が、この作品を対象とした研究に従事してきた。研究の材料として重宝される理由として、しばしば「中国小説史上初めて一人の作者によって書かれた創作小説」、或いは「当時の庶民の生活を話し言葉でありのままに描いた」といったことが挙げられる。また、「明代中葉の山東方言に基づいて書かれた」ということを前提に、言語資料として使用される根強い風潮がある。しかし、作者不明、成立年代不明の作品に、これほどまでに過大な期待を寄せていいのだろうか。成立年代や地域がはっきりした、信頼できる資料を、その時代や地域の言語の指標とし、語法面での特徴を断代史的に並べ、年表のように示す研究は大切であると同時に魅力的であるが、この作品自体の語法史上の位置づけ、本当に個人創作であるかどうかについての検証がまだ不十分なのではないだろうか。実際、個人創作だという説に対して、語り物を書きまとめたものだという反論も多い。作者問題、方言問題は、前世紀から今に至るまで議論が紛糾し続けている。仮に本当に、文人の創作だったとしたら、反映されているのは、当時の実際の話し言葉というより作者によるフィルターがかけられたものである可能性が高い。つまり、より多くの人が読んで理解できるものになっている。このような広い読者層を想定した、いわば読み物用の「共通語」を本論文では「文学言語」と呼んでいる。本論文は、作者や方言をめぐる問題に関する先行研究を整理した上で、新しい見方による論証を行い、『金』研究の基礎を固めた上で、語法上の特徴について論じる。本論文で語法上の問題を検討する目的は、『金』に見られる特徴的な現象を記述することではなく、ある語法形式が用いられる背景には、作者のどのような操作があるのかを探ることである。この操作には、人物を描き分けたい、人物の感情を表したいといった意識的なもの、作者が普段使っている方言の露出のような無意識的なものの両方を含む。

## 第一章

作者は一体誰なのか、一人で書いたのか、それとも複数の人物で書いたのかという、いまなお紛糾し続けている問題に関する主な論争を取り上げ、従来の説において、小説用の言葉「文学言語」と個人の言葉を分けずに分析がされてきたという問題点を指摘した上で、言語的に雑多に見えても、（第 1~6 回及び第 53~57 回を除いた「本体」の部分）は一人の人物の言語体系に基づいて執筆されたものである可能性を検討する。

## 第二章

成立年代と作者問題について言語学、文学の立場に基づいた様々な先行研究を整理し、論争の歴史を概観する。

### 第三章

語順は違うがいずれも「ものをどこかに置く」動作を表す“VO在L”と“把OV在L”の二つの形式の用法について現代の普通話と『金』の状況の比較、現代方言での用法、現代のその他の作品との比較を行った。“VO在L”は、現代の普通話では、賓語は数量詞を伴った「不定指」の名詞成分でなければならない、動詞はそれほど強い働きかけを必要としない動作を表すという限られた条件下でしか用いられないが、『金』ではしばしば用いられる。名詞には普通話のような制限がなく（表 1）、Vが表す動作も普通話のそれと較べると多様である（表 2）。

表1 『金』の“VO在L”における賓語の名詞性成分

人称代名詞(13)

人名(6)

指示代名詞＋量詞（＋名詞）(8)

裸名詞(39)

数詞＋量詞（＋名詞）(4)

“一”＋量詞（＋名詞）(7)

量詞＋名詞 (3)

…「有界化」が未完成、“把”の動詞用法

表2 『金』の“VO在L”における動詞

（出現回数）

11	放
6	接
4	遞
3	丟, 拿/拏, 取, 撒, 討
2	按, 抱, 穿, 懷, 扣, 搜, 偷, 招, 藏
1	安, 安插, 把, 擺, 藏鎖, 帶, 得, 丟放, 關, 稍寄, 勒, 買, 拈, 切, 擎, 傾, 娶, 聳, 送, 舒, 提, 吐, 拖, 呬, 寫, 影

また“VO在L”を用いる現代の方言と比較すると、その他の動補構造についても動詞と結果成分の間に賓語が挟まる形が存在するという共通点が見られる。動詞と結果成分の結びつきが強まり、賓語が間に挟まる形が淘汰されていくというのが語法史の流れであるとする、この変化の進み具合から、作品が書かれた地域のことばがどの段階にあったのかがわかるのではないだろうか。『西遊記』（以下『西』）、『拍案驚奇』（以下『拍』）と比較してみた（表 3）。

表 3

	『西』	『金』	『拍』
“VO 在 L”用例数	21	80	39
VO 在 L: 把 OV 在 L(割合)	1:10	1:1.8	1:1.8
V の構造			
二音節動詞	1(4.7%)	3(3.7%)	1(3%)
アスペクト助詞有り	2(9.5%)	17(19.5%)	11(28.2%)
補語有り	0	1(1.2%)	1(3%)
四字句	12(57.1%)	12(15%)	4(10.3%)
L=指示詞	5(23.8%)	10(12.5%)	8(20.5%)

また、『金』における二つの形式の割合を調べると、第 53～57 回と本体の部分で大きな違いがある（表 4）。

表 4

	VO 在 L	把 OV 在 L	比率
第 1～6 回	10	17	1:1.7
第 53～57 回	6	1	6:1
本体	64	126	1:1.96

#### 第四章

六種類ある「過去・已然」の否定副詞について、それぞれの特徴と用法について詳細に論じた。調査に当たり『金』の成立事情を考慮し、全体を第 1-6 回、第 53-57 回、その他の部分（本体）の三つの部分に分けた。それぞれの箇所による出現頻度は表 5 の通りである。

表 5

	1-6	本体	53-57	計
未	17(49%)	151(17%)	6(12%)	174(18%)
未曾	0	19(2%)	1(2%)	20(2%)
不曾	16(46%)	204(24%)	22(44%)	242(25%)
沒	2(6%)	395(46%)	14(28%)	411(43%)
沒有	0	18(2%)	4(28%)	22(23%)
沒曾	0	79(9%)	3(6%)	82(9%)

パーセンテージは、各部分における六種類の用例数の合計を 100%として、それぞれが占める割合を表す。「計」では全 100 回分のデータを表す（小数第一位で四捨五入）。

次に六種類の否定副詞について、①文法的特徴②用いられる「場」、に注目して分析を試

みた。使用頻度上位二位の“不曾”と“沒”については両者を対比させながら分析した（表 6、7）。

表 6

不曾	全体	1-6	本体	53-57
総数	242	16	204	22
正反並置	88(85)	1(1)	87(84)	0
VP の構成				
V (+O)	109	8	88	13
- 了	65	2	63	0
- 得	18	4	7	7
- 着	12	1	11	0
- 過	4	0	2	2
- 補語	31	1	30	0
能願動詞	3	0	3	0
地の文	45	2	37	6
会話文	197	14	167	16
話者の性別				
男	113	7	96	10
女	84	7	71	6

表 7

沒	全体	1-6	本体	53-57
総数	411	2	395	14
正反並置	2	0	2	0
VP の構成				
V (+O)	320	1	305	13
- 了	12	0	12	0
- 得	5	0	5	0
- 着	8	0	7	1
- 過	3	0	3	0
- 補語	57	1	56	0
能願動詞	7	0	7	0
地の文	58	0	58	0
会話文	353	2	337	14
話者の性別				
男	143	1	136	6
女	210	1	201	8

表 8 特に会話の場面の多い人物の使用状況

		西門慶	潘金蓮	吳月娘	応伯爵	孟玉楼	春梅	玳安	陳經濟	李瓶児	薛嫂	平安
不曾	1-6	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	本体	39	13	17	14	7	5	3	5	3	2	1
	53-57	2	3	0	4	0	0	1	0	1	0	0
	合計	43	19	17	18	7	5	4	5	4	2	1
沒	1-6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	本体	42	50	33	20	18	16	15	10	12	9	9
	53-57	2	1	6	1	0	0	0	0	0	0	0
	合計	44	51	39	21	18	16	15	10	12	9	9
不曾+沒		87	70	56	39	25	21	19	15	16	11	10
“沒”の割合(%)		51	72	70	54	72	76	79	67	75	81	90

その他の四つの否定副詞に関しては表 9～12 を参照。

表 9

未曾	全体	1-6	本体	53-57
総数	20	0	19	1
正反並置	0	0	0	0
VP の構成				
V (+O)	16	0	16	0
- 了	0	0	0	0
- 得	0	0	0	0
- 着	0	0	0	0
- 過	0	0	0	0
補語	4	0	3	1
能願動詞	0	0	0	0
地の文	10	0	10	
会話文	10	0	9	1
話者の性別				
男	6	0	5	1
女	4	0	4	0

表 10

没有	全体	1-6	本体	53-57
総数	22	0	18	4
正反並置	16(16)	0	13(13)	2(2)
VP の構成				
V (+O)	10	0	7	3
- 了	6	0	6	0
- 得	0	0	0	0
- 着	1	0	1	0
- 過	1	0	1	0
- 補語	4	0	3	1
能願動詞	0	0	0	0
地の文	0	0	0	0
会話文	23	0	18	4
話者の性別				
男	5	0	4	1
女	17	0	14	3

表 11

没曾	全体	1-6	本体	53-57
総数	82	0	79	3
正反並置	1(1)	0	1(1)	0
VP の構成				
V (+O)	45	0	42	3
- 了	12	0	12	0
- 得	8	0	8	0
- 着	4	0	4	0
- 過	0	0	0	0
- 補語	13	0	13	0
能願動詞	0	0	0	0
地の文	8	0	8	0
会話文	74	0	71	3
話者の性別				
男	30	0	27	3
女	44	0	44	0

表 12

未	全体	1-6	本体	53-57
総数	173	18	149	6
正反並置	2	1	1	0
VP の構成				
V (+O)	150	17	126	4
- 了	0	0	0	0
- 得	0	0	0	0
- 着	0	0	0	0
- 過	0	0	0	0
- 補語	20	0	21	0
能願動詞	4	0	2	2
地の文	81	11	68	1
会話文	93	6	81	5
話者の性別				
男	58	0	55	3
女	35	7	26	2

## 第五章

ここでは方言の問題にウェイトを置いた。“可 VP” 疑問文の分布から第 53 回から 56 回の異質性 (第 57 回には“VP 不 VP” も“可 VP” も存在しない) を証明した、朱德熙 1985 は画期的な論考であるが、“可 VP” を、“VP 不 VP” と相補分布する正反疑問文と定めてしまった上、純粋な“可 VP” と、“可” とその他の疑問を表すマーカ―や形式が共存するものを一律に扱ったため、なお議論の余地がある。現代方言の状況や、その他の疑問を表すマーカ―や方式との共起といった問題から、本論文では疑問副詞“可”を用いた是非疑問文と見做すことにして、他の手段に頼らない純粋な“可 VP” の多寡を手がかりに“可”の疑問を表す語気の強さに注目した (表 13)。

表 13 『金』 “可” を含んだ疑問文の内訳

	①可 VP?	②可 VP 麼?	③可 VP 否/不曾	④可 VP 不 VP?	⑤疑問詞
用例数	7	9	6	1	1
用いられる章回	25,36,53,54, 54,54,76	16,35,53,53,54 55,56,62,93	30,63,65,67,68, 77	69	30

(斜字体は補作されたとされる章回)

『儒林外史』 (表 14)、『西遊記』 (表 15) とともに比較し、方言間で疑問副詞“可”の疑問の語気の強さに違いが出ること、『金』の内部差異とも呼応することを証明した (表 16)。

表 14 『儒』

可 VP?	可 VP 麼?	可 VP 否/沒有?	可 VP 不 VP?	疑問詞
126	22	0	0	4

表 15 『西』 “可” を含んだ疑問文の内訳

可 VP?	可 VP 麼?	可 VP 否?	可 VP 不 VP?	疑問詞
101	76	3	0	1

表 16

	『金』		『儒』	『西』
		53-56		
可 VP?	○	○	◎	◎
可 VP 麼?	○	○	○	◎
可 VP 否/沒有?	○	×	×	○
可 VP 不 VP?	○	×	×	×
疑問詞	△	×	△	○

○用例が存在する、×用例が存在しない、◎用例が特に多い、△疑問代詞を使っているが、意味は是非疑問文

## 第六章

本章は、本文中で度々言及する『金』に特徴的な禁止否定副詞“別要”について詳しく説明するために設けた一章である。誕生に至るまでの経過や、『金』での用法について述べ

る。『金』には 38 例見られ、家庭内の人間や妓女とのやりとりといった比較的くだけた場面でのやりとりばかりで、フォーマルな場面での使用例は見られなかった。

## 第七章

第 53~57 回の問題についてまとめる。この五回分は、第三、四章の結果から鑑みるに、語法史的な変化が遅れていて（或いは今でも変化そのものが起こっていない可能性もあるが）、また第三章、第五章の結果から、他の部分と異なる方言に帰納される可能性が高いことがわかった。

## 終章

以上の結論を踏まえ、今後の『金』研究の課題、特に語法、語彙、文字、文学など、分野を超えた研究の必要性について考える。